

2022 年度 FD 活動評価点検報告書

1. 中部大学の FD 活動組織について

本学における教育活動・改善に向けた教員の資質向上策としての FD (Faculty Development) 活動は、図 1 のように、学長を委員長とした全学 FD・SD 委員会のもと、各学部 FD 委員会および各学科組織があり、全学体制の FD 活動ワーキングが中心となって種々の検討を行っている。また、教育活動顕彰審査選考委員会や FD 活動評価点検委員会が組織されており、FD 活動の内容について評価できる体制が整っている。なお、全学 FD・SD 委員会および学部 FD 委員会は、2007 年度まで本学に設置されていた FD 推進委員会および学部での FD に関する諸活動をそれぞれ 2008 年度より新しく改変した組織である。また、主管部署として、大学企画室高等教育推進部（教員 2 人、事務員 3 人で構成）が FD 活動の推進・支援を行っている。

さらに、「大学設置基準等の一部を改正する省令」が 2017 年 4 月 1 日から施行され、SD (Staff Development) が義務化されたことを受けて、本学の教員・職員のキャリア形成を図る組織的な取り組みを推進するため、2019 年度に全学 FD 委員会を全学 FD・SD 委員会に再編し、その専門委員会として SD 活動 WG を新たに設置した。全学 FD・SD 委員会により企画・開催される FD プログラムは、大学教育を支援する職員の SD プログラムとしても機能しており、職員も教員と共に参加することで自らの職務遂行上の資質向上に役立てている。

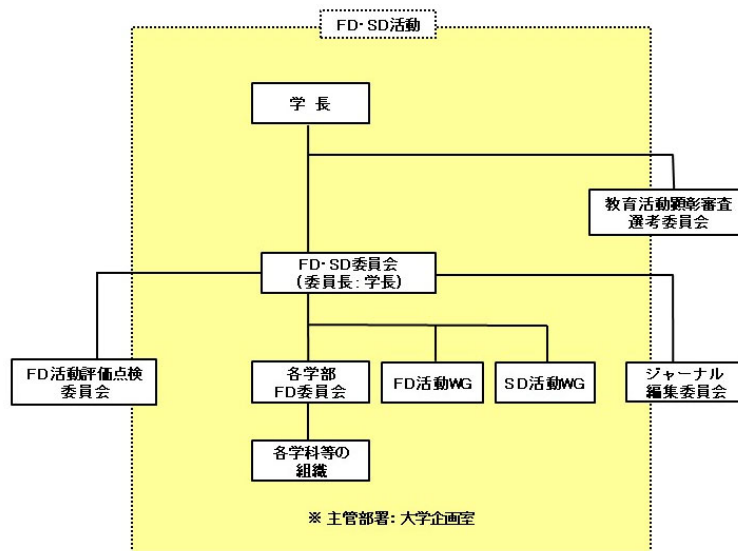


図 1 中部大学の FD・SD 活動組織図

FD・SD 委員会：本学の FD・SD 活動全般について、学長を委員長として審議、検討をする。

FD 活動 WG：FD・SD 委員会の専門委員会として、学部代表の FD 委員を中心に主に全学的な活動を企画する。

SD 活動 WG：FD・SD 委員会の専門委員会として、SD 活動の全学的な推進を図る。

FD 活動評価点検委員会：本学の FD 活動全般について、第三者的な立場にたって評価点検をする。

教育活動顕彰審査選考委員会：教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考する。

ジャーナル編集委員会：FD・SD 委員会の専門委員会として、高等教育（大学教育）全般に関する研究成果、および本学での教育に関する分析研究、実践報告等を学内外に発表するために『中部大学教育研究』を発行する。

2. 本学の FD 活動評価点検の対象

本学の FD 活動は、次の表に示すように 3 つの観点から分けられる。広義の FD 活動の目的となりうる「カリキュラム改善」や「組織の整備・改革」に関する諸活動は、FD・SD 委員会の所掌事項でないため、これらを目的とした活動（網掛け部）は、本報告書の内容には含めていない。なお、授業担当者のみの授業改善の活動は、「教員活動重点目標・自己評価シート」と「学生による授業評価、教員による授業自己評価」によって実施され、後者は学内向けにホームページ上で公開されている。

表 1 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動

【※1】 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動（網掛け項目は除外する項目を表す）

目的別にみた FD 活動	対象別にみた FD 活動	形式別にみた FD 活動
1) 授業・教授法の改善	1) 全学対象	1) 会議 (*2)
2) 教員の資質向上（研究交流を含む）	2) 学部・研究科対象	2) 講演・報告会形式
3) FD 活動の企画・運営など	3) 学科・教育科対象	3) ワークショップ形式 (*3)
カリキュラム改善	(*1) 非常勤講師を含む	4) 制度・システムの構築や改良、出版など (*4)
組織の整備・改革	(*1) 学生を含む	
	授業担当者	

(*1)：対象別分類の 1)～3)の活動の中で、非常勤講師を含む、学生を含む場合

(*2)：形式別分類の 1) 会議は、複数担当者による授業科目の内容等に関する打ち合わせ等は含めない。

(*3)：形式別分類の 3) ワークショップ形式の活動の中には、懇談会・相談会等の双方向型の活動を含む。

(*4)：授業評価システム、授業改善アンケートの制度の運用やシステムの構築や改良、および出版などが該当

3. 2022 年度の FD 活動の重点目標

FD 活動の重点目標として 2008 年度より 5 年間を目安とした『魅力ある授業づくり』は、2013 年度以降も重点目標とすることが 2012 年度の FD 委員会で決定され、以下の考え方をもとに 2022 年度も継続して FD 活動を進めてきた。

『魅力ある授業づくり』は、学生と教員が協同して行うものです。

魅力ある授業・・・（学生にとって）興味を持って聴ける授業、将来において役立つ授業
（教員にとって）学生の成長を実感できる授業、学生から感化を受ける授業
授業づくり・・・（学生が目指す）自主的に学ぶ態度、知識・技術の修得
（教員が目指す）授業改善、授業スキルアップ
（学生と教員が目指す）双方向のコミュニケーション

本学では、評価点検の結果から改善を繰り返し、個人レベルから、学部学科を越えたグループ、学部学科、全学を対象に活発な FD 活動を進めてきた。こうした中、教育実践現場である各学部では、以下のような FD 活動の目標設定を行い、FD 活動に積極的に取り組んだ。

(1) 工学部・工学研究科

FD・SD 講演会、FD フォーラム、FD カフェ等に積極的に参加し、「魅力ある授業づくり」を理解し着実に実行するための組織的サポートを行う。

1) 「中部大学教育活動顕彰制度 受賞者による講演会」を開催し、受賞者より「魅力ある授業

- づくり」について講演頂き、各教員の「魅力ある授業づくり」の一助とする。
- 2) 「魅力ある授業づくり」に相応しい話題を見つけ、工学部 FD 講演会として随時開催する。
 - 3) 全学公開授業、授業サロン、FD カフェ、キャリアアッププログラムなど、学内で開催されるセミナー等への参加を強く推奨し、工学部内での情報共有を図り、各教員の「魅力ある授業づくり」の一助とする。
 - 4) 「CU ルーブリックライブラリ」を積極的に活用し、授業に反映させ、「魅力ある授業づくり」に努める。
 - 5) 「Cumoc」の活用を目的とした講演会を開催し、授業に反映する。
- (2) 経営情報学部・経営情報学研究科
- 1) 『魅力ある授業づくり』に関する目標
 - ・学生の「授業評価」への参加を向上させると共に、教員は「授業評価」をもとに授業改善に務める。
 - ・本学の「教育活動顕彰制度」の受賞者による講演会を開催し、「魅力ある授業づくり」について報告いただき、各教員のスキルアップにつなげる。
 - 2) ハラスメント講演会の実施
ハラスメントに関する講演会を実施し、教育研究の場で起こりうる様々なハラスメントの防止・対策に努める。
 - 3) 経営情報学部研究会の定期的な開催
研究の情報交換、共同研究のネットワークづくり、研究のブラッシュアップの場として、経営情報学部研究会を定期的に開催し、教員の資質向上に努める。
 - 4) (学部) ICT 教育に関する勉強会の実施
リモート授業の質向上、タブレット教育推進のための勉強会を実施する。
 - 5) (大学院) 学生の授業評価に基づいた授業内容の改善
授業アンケートにより得られた学生からの意見を共有し、授業内容の改善及び大学院教育の充実に努める。
- (3) 国際関係学部
- 1) 2007 年から本学が推進する ESD/SDGs 教育の礎となり、本学部が世界に先駆けて研究推進してきた「人間の安全保障」の理念を改めて、学部構成員・学部生が共有するように努める。
 - 2) 本学が推進する SDGs にかかる学部の講演会、研究会、シンポジウムなどを実施し、「授業外の学びの機会」を提供していくことで、学生のモチベーションの向上と、教員の知見を深める。このほか、高大連携研究会、地域・企業連携研究会（春日井市 SDGs 推進企業との意見交換会を含む）を実施する。人権の重要性を再認識させるため、客員教授による人間の安全保障講演会および学部構成員・学部生向けのハラスメント防止講習会を開催する。
 - 3) 教員の心身の健全に留意し、ワークライフバランスを実現する必要がある。そのために、教員数のスケールメリットを活かして管理運営業務の可視化と教員間の分担を可能にする。その上で、『魅力ある授業づくり』に資するため、研究時間を確保し、研究力を高める。教員間の業務平準化に向け、科目のコーディネーターや取りまとめ等のインビジブル・ワークを業務量として正確に把握するよう努める。
 - 4) 「卒業研究」への取り組みについて、本学部が多ディシプリンの専門領域を持つことに鑑み、2019 年度から開始した「卒論閲覧会」等を通じ、教員間に共通の認識を醸成するとともに、

評価基準の明確化に向けて 2021 年度に導入が決定されたルーブリックライブラリの制作を進める。

- 5) 20 号館 1 階の「グローバルフォレスト」を活用し、2021 年度から試行的に始まった「コクサイ歳時記」を定期的開催し、学生のモチベーションの向上および多様な専門、ジェンダー、国籍、年代が混在する空間を創出するとともに、教員の知見も深める。

(4) 人文学部

1) FD・SD 活動の目標

- ①高校と大学との連携を強化し、スムーズに大学教育への移行を図る。
- ②学生の主体性を育成するための魅力ある授業づくりの実現に向けて取り組む。
- ③学生と教員によるフィールドスタディを通じて春日井市を中心とした地域社会との連携を強化する。
- ④2023 年度から人文学部が独自に始動する「7 学部間横断プログラム副専攻」、「学部内学科横断プログラムクロスオーバーSDGs プロジェクト」等を含む SDGs 教育の導入及び「人間力を育成する学問の総合化」を目指す新教育プログラムの実現化に取り組む。

2) FD・SD 活動の計画

人文学部では各学科の特性を生かしつつ、複雑化する現代社会の課題に応えることのできる「確かな学力」と「コミュニケーション能力」を兼ね備えた「あてにされる人間」の育成を目標とする。学生には学内および課外活動を通じて人と積極的に関わることで多様な視点を獲得し、主体的に考え行動できる力を身に付けさせる。また 2023 年度から人文学部が独自に始動する「7 学部間横断プログラム副専攻」、「学部内学科横断プログラムクロスオーバーSDGs プロジェクト」等を含む SDGs 教育を導入することで「持続可能な社会」に向けた問題解決能力を育成する。

- ①各教員が学生ポートフォリオの活用をとおして日々の学習態度に関する情報を共有し、学力向上・維持に向けた意見交換を図る。併設校を中心とした高大連携の強化および各学科にて初年次教育を細やかに実践し、かつ独自のピアサポーター制度を活用することにより、恵那研修等の行事をとおして 1 年次から自己の将来像を意識させることに取り組む。
- ②『魅力ある授業づくり』に関し、学生・教員の「授業評価」への参加を向上させ自己の授業改善に努める。秋学期には、教育活動顕彰制度で表彰された教員の報告会を行い、意見交換を図る。
- ③自己点検・評価における全学的課題のうちの「シラバスと講義内容との整合性の検証」について、各学科で検証方法、および問題があった場合の対応方法を確認し、実施する。
- ④自己点検・評価における全学的課題のうちの「内部質保証体制の充実」について、毎年の自己点検・評価の書類を提出する前に学科間で客観的視点からチェックし合い、要改善点等の認識も織り込んで提出するようにする。
- ⑤従来の講義形式と学生に能動的な学修を求める参加型学習法である双方向型授業を組み合わせる授業や学科横断的な授業に取り組むこと。加えて遠隔授業やオンライン授業の充実化を図るための情報交換を行う。学部所属教員全体に本学部および本学の FD・SD 初年次教育関連の講演会・セミナー・研修会への積極的な参加を促す。

3) FD・SD 活動の実践に向けて

魅力ある授業づくりとは、「学生と教員が協同して行うもの」である。学生に興味を湧かせ将来役に立つ授業および教員にとって学生の成長を実感し、常に学生から感化を受ける授業を意識しながら、学生との日頃のコミュニケーションに基づき、学生にとってわかりやすい

魅力ある授業づくりを推し進め、学部全教員はそれを実現できるように FD・SD 活動を行う。

(5) 応用生物学部・応用生物学研究科

1) 応用生物学部 FD 推進委員会

○委員会の開催

定期的に委員会を開催し、2020 年度 FD 活動の評価点検、2021 年度目標達成への活動推進、2022 年度の活動目標の設定を行うほか、必要時にはメールにて審議・連絡を行う。

○学部 FD 活動目標

－FD 活動の見える化、共有化を目指す－

○『魅力ある授業づくり』に関する目標

①『魅力ある授業づくり』に関して、授業改善につながる学部内の報告会や意見交換会を計画する。特に、教育活動優秀賞を受賞した教員をパネラーとした討論の場を設け、授業改善に向けた情報共有を行う。

②『魅力ある授業づくり』に関して、学生による授業評価、教員による授業評価、およびコメントへの回答の回収率向上を具体的目標として学部全体で継続し、取り組む。

③『魅力ある授業づくり』に関して、各教員の授業改善に関する重点目標、および授業評価コメント一覧の良かったところ、改善点等を参考とし、自己の授業改善に努める。

④学部 FD 講演会開催

多様化する学生を支えるため、学生サポートや授業改善に関する講演会や意見交換会を開催する。

⑤各教員は、全学 FD 講演会その他の全学レベルの FD 支援活動に積極的に参加する。

2) 学科（専攻）、研究科等

学科会議、研究科委員会などを通して定期的に FD 情報（教務モニター、授業アンケートなど学生の意見、FD 講演会その他の内容等）の交換を行い、必要に応じ目標設定を行う。

(6) 生命健康科学部・生命健康科学研究科

1) [学部] 春学期中に授業検討会を行い、学部の共通の課題を議論すると共に、学生にとって有用な魅力ある授業となるように課題解決を目指す。

2) [学部] 実習科目、演習科目については可能な限りルーブリック評価の導入を目標にする。

3) [学部] 各学科の特色をより活かした教育につながる FD 活動もあわせて実施する。

4) [大学院] 大学院特論等において、授業評価アンケートを実施し、その結果を担当教員で共有することにより授業改善に役立てる。

5) [大学院] 大学院担当教員は学部教員とほぼ重複するため、学部における FD 活動内容を共有して大学院教育に活かす。

6) [大学院] パンフレット「研究の心得」を活用し、より一層の教育・研究の内容を高める。

7) 秋学期の終了時に、学部・研究科教員全員を対象にした『魅力ある授業づくり』につながる FD 講演会（研修会）を計画する。

8) 学部教職員の教育・職域ハラスメントに対する防止意識向上のため研修を実施する。

(7) 現代教育学部・教育学研究科

1) FD 活動の目標

①現代教育学部

- ・教員の『魅力ある授業づくり』のための力量向上
- ・現代教育学部における現状と課題についての共有
- ・新しい大学教育、特にカリキュラム開発の研究を他学部との交流を含めて探究する。

②大学院教育学研究科

- ・学部、現代教育学研究所と連携した授業改善と大学院教員の資質の向上
- ・他大学・他学部との研究交流の実施による教育・研究の創発
- ・共同研究と外部資金獲得の試み

2) FD 活動計画

①現代教育学部

現代教育学部の教育研究に関する新たな試みを模索する。そのために、FD&SD 講演会を開催し、互いの研究内容を把握して、今後の研究交流の方針を定める。

現代教育学部および大学院の教員の教育・研究のポテンシャルを高め、『魅力ある授業づくり』のための力量向上を目指して、学内外からの講師を招聘し、年度内に数回の FD&SD 活動を実施する。

②教育学研究科

教育学研究科として、研究・教育の一層の発展を目指すために、現代教育学部において実施される FD&SD 活動と連携し、FD&SD 講演会を共催するとともに、研究科が主催して FD&SD 講演会を実施し、構成員の教育・研究活動の推進を図る。

(8) 人間力創成教育院

人間力創成教育院設置の理念の下、FD 活動の継続的推進を図る。EP を越えた FD 活動はどのようにあるべきかについても議論し、各 EP が担当する科目の教育内容・教育理念に関して、懇談会・研修会を通してコロナ禍における講義の充実について検討するとともに教材提供等による教員間の共通理解の形成を図る。さらに魅力ある授業づくり等に向けての取り組み（例えば、授業方法の改善、学生による授業評価、教員による授業自己評価の実施率を高める等）のための学外の研修会や教育関連学会への参加等の各種方法についても検討する。

さらには各 EP 担当科目や SDGs 教育科目の魅力ある授業づくりのための改善（授業方法・授業内容・体制・施設・設備等の改善・充実と学外の研究会・ワークショップへの参加によるスキルアップ等）をより一層図るとともに、科目の精選に関する考察を深める。

また、文科省中教審で計画的展開が要請されている「高大連携・接続」の一環として、本学が進めている併設高校との高大連携授業ではセンターが担当する部分が多く、関係教員との FD 活動を通じて、本学にとっても高校（生）にとっても魅力ある授業づくりを検討する。

(9) 国際人間学研究科

1) FD 活動の目標

- ①構成員の専門分野が社会科学・人文科学に跨る多彩な学問領域であり、学生も様々な国籍・年齢層にわたるため、研究会・発表会などを通じて互いの専門分野についての理解を深め、多角的視点から専攻を越えた教育・研究指導を行える環境を育む。
- ②2021 年度から開始される研究科横断的新教育プログラム（持続社会創成教育プログラム）に対し、本研究科として可能な貢献の在り方を検討し、プログラム履修生の目標に応じた教育を実践する。
- ③学外の研究者や地域との交流による研究・教育能力の向上を図りつつ、学生の要望や意見もくみ上げながら「魅力ある授業」をつくりあげていく。

④様々な文化背景をもつ学生が所属することから、著作権・肖像権・個人情報保護等、研究倫理に関わる事項について、まず教員が正確な知識を身につけ、これらの侵害がないよう指導を徹底する。

2) FD 活動の計画

①これまで継続的に実施してきた研究科の所属教員による研究報告会（年 2 回）、学生とその指導教授による研究報告会（年 2 回）を開催し、報告誌「Glocal」を 2 冊刊行するとともに、教員間・学生間の相互理解や交流を深める。

②学外から専門家・識者等を招き、シンポジウムや講演会などの形態をとりながら、教育・研究の向上に資する知識・情報・ノウハウの吸収に努める。

③国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各分野、また、それらを横断的につないだ分野でのシンポジウムや講演会の実施を促進し、その成果を「魅力ある授業づくり」に活かしていく。

④国際人間学研究所が推進している「持続可能な観光」プロジェクトと連携しつつ、研究科としての社会連携・地域連携をさらに推進する。また、研究所と連携して科学研究費等の外部資金の獲得に向けた情報交換会を行ない、特に若手研究者の応募促進に努める。

⑤上記の計画を実現するために FD 活動への積極的な参加を促す努力を継続し、研究科全体の FD 意識を向上させる。

4. 2022 年度の FD 活動の取り組み

4. 1 全学の取り組み

2022 年度の全学としての取り組みは、大学企画室高等教育推進部の WEB サイトに詳細が掲載されている (<https://www.chubu.ac.jp/fd/>)。主な取り組みは、(1) 教員による教員活動重点目標の設定および自己評価 (2) 授業改善の取り組み (3) FD フォーラム・講演会 (4) キャリアアッププログラム・FD に関する研修会等 (5) FD カフェ (6) 出版物 (7) 教育活動顕彰制度 (8) 中部大学『魅力ある授業づくり』プログラムの実施 (9) FD オンデマンド講義 (全国私立大学 FD 連携フォーラム実践的 FD プログラム) の提供 (10) FD・SD 研修会等である。

なお、これらの現状と評価を記述する。

(1) 教員による教員活動重点目標の設定および自己評価

近年の内部質保証の観点から、教育のみならず研究、社会貢献、学内行政等についても評価・点検の実施、および改善向上が教員には求められている。このことを反映して、「教員活動重点目標・自己評価シート」では上記の 4 つの責務（教育・研究・社会貢献・学内行政）について、年度初めに各教員が教員活動重点目標を設定し、年度末に自己評価を行っている。2018 年度から大学設置基準上で教員と区分される助手（教育・研究の補助を主たる職務とする）も対象とし、これを機に全学部共通のレイアウトに変更となった。2022 年度の目標設定者は在籍教員の該当者 516 人中 497 人（未提出者 19 人は、欠勤等により提出できない者）、自己評価提出者は目標設定者 497 人中 489 人（未提出者 8 人は退職、欠勤等により提出できない者）であり、ほぼ全ての教員が提出した。

(2) 授業改善の取り組み

『魅力ある授業づくり』のための主な取り組みとして、以下の 7 つに取り組んできた。

1) Web による「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」

「授業評価」の学生の回答率は、春学期約 39%（昨年度は約 39%）、秋学期約 30%（昨年度は約 32%）であった。自由記述においては、春学期 3,212 件（2,956 件）、秋学期 2,179 件（2,319 件）であった。学生の回答率については、コロナ禍が始まった 2020 年度以降漸減しているものの、2019 年度以前と比べると比較的高い値を維持している。

一方、教員の自己評価回答率は、春学期約 65%（昨年度 60%）、秋学期約 66%（昨年度 62%）であった。さらに、コメント率は、春学期約 64 %（昨年度 66%）、秋学期約 66 %（昨年度 64%）であった。回答率に関しては、教職員に対して積極的に入力する旨、呼びかけを行ったことも奏功してここ数年よりは高い率となった。

2) 携帯電話を活用したクリッカーシステムの提供（授業改善アンケートシステム）

携帯電話やスマートフォンを活用して、授業中に教員がネット環境を使える場所であれば、学生の反応を瞬時に把握できる本学独自のクリッカーシステムである「Cumoc（キューモ：Chubu University Mobile Clicker）」を導入して 12 年目となる。2011 年 7 月には、利用の研修を行う目的で「CumocL」を整備し、同システムを活用して 2013 年 4 月に一般的なアンケートシステムとして学内に提供を開始した。また、2017 年度より、それぞれの設問間のクロス集計が可能になるよう改善した。

なお、「授業改善アンケート（Cumoc の利用を含む）」は、春学期 141 件、秋学期 51 件で合計 192 件（2021 年度 104 件）の利用であった。オンライン授業が浸透して以降、多様な ICT ツールを利用できる中で当該アンケートシステムもそれらのうちの一つとして選択されていることが分かる。

3) 授業改善ビデオ撮影支援制度

授業改善ビデオ撮影支援制度は、授業担当者からの希望による振り返りのための教育支援として撮影提供しており、2022 年度は、5 件（2021 年度 5 件）であった。また、「全学公開授業」は不実施のため、その記録撮影が無かった。

4) 授業のオープン化制度

授業担当者に申し出ることで、他の教員が授業を参観できるシステムであり、後述の「全学公開授業」「授業サロン」もこの趣旨を基に実施している。

5) 全学公開授業

2022 年度は「全学公開授業」の開催はなかった（2021 年度は 3 件実施し、35 人が参加）。この公開授業は実施者および見学者双方に授業改善のヒントが得られる取り組みである。後述するように、参加者増のための対策が必要である。

6) 授業サロン

「授業サロン」では、専門が異なる学部を越えた 5 人の教員による授業見学とピアコンサルティングが行われる。これまで春および秋学期に 1 回ずつ開催することが多かったが、2022 年度は 2021 年度と同様に、秋学期に 1 グループの実施であった。全学公開授業と同様に、参加者数増加のための対策が求められる。

7) CU ルーブリックライブラリ

教育の質保証を目指す上での成績評価方法の 1 つであるルーブリックの「蓄積」から「共有」、そして「作成支援」に繋げることを目的として、2016 年 3 月に運用を始めた。2022 年度末時点で非公開を含めて 42 件（2021 年度末時点 34 件）の登録があった。

(3) FD・SD フォーラム・講演会

以下の 2 件の講演会を開催した。

1) 第 58 回 FD・SD 講演会「なぜ今の若者はそこまで目立つことを恐れるのか？

ーキャンパス内で急増する「いい子症候群」の心理的特徴ー

講 師：金間 大介 金沢大学 融合研究域 融合科学系 教授

東京大学 未来ビジョン研究センター 客員教授

参加人数：125 名

2) 第 59 回 FD・SD 講演会「合理的配慮」に関する考え方とその対応

ー私立大学での合理的配慮提供義務化に向けてー

講 師：舩越 高樹 独立行政法人 国立高等専門学校機構 本部

特命准教授／学生参事補

参加人数：140 名

*学生サポートセンターとの共催

(4) キャリアアッププログラム・FD に関連する研修会等

2009 年度から開催してきた「教員キャリアアッププログラム」は、教員の授業スキルを含めた「授業改善」に関連したプログラムはもとより、「ICT（情報技術）」や「学生への対応」など幅広い目的をもつワークショップである。教職協同のプログラムとして、職員も参加し実施してきた現状を踏まえ、2017 年度から、「キャリアアッププログラム」と名称を変更し実施している。

2022 年度は 11 回開催した（2021 年度 11 回）。大学企画室客員教授による「授業技術（話し方）」（6 回）、「授業デザイン」（2 回）、「授業技術・運営」「学生への対応」（各 1 回）に関するプログラムをはじめ、学内講師を招いた「学生への対応」に関するプログラム（1 回）を実施した。開催方法については、講師の意向や実施内容を考慮して、対面およびライブ発信形式を柔軟に使い分けた。後者のライブ発信の場合にも、グループ討論・作業を積極的に採り入れることにより、参加者間の交流やプログラム内容の習得を対面時とほぼ変わらないレベルで行えるよう企画した。

また、今年度も新任教員説明会は実施されず、本学 FD 活動の概要を資料送付にて説明している。

(5) FD カフェ

FD カフェは、教職員による自由な意見交換の場である。大学教育に関するさまざまなテーマ、学生と直面している必要な知識などの実践的なテーマに関して自由に意見を交わすことで情報やスキルを共有する場を提供することを目的として開催されている。2022 年度は春および秋学期にそれぞれ 1 回（2021 年度もそれぞれ 1 回開催）、新規採用者向けのスタートアップ企画、および魅力ある授業づくりに関する内容を開催した。特に后者では、各学部から推薦された話題提供者によるパネル討論形式での運営となり、授業づくりについての多様なアイデアを共有および交換する場となった。

(6) 出版物

『教育・研究活動に関する実態資料』及び『中部大学教育研究』を刊行している。前者は、様々な基礎データを集約し、学内各種制度や対外的な申請や審査の基礎資料として、また大学の情報公開のための基礎資料として活用されている。後者は、1979年より刊行されてきた『教育資料』を充実させ、新時代の大学教育の理念・手法・改善策などを論じ合う場を提供するものとして、教育改善・質的向上に役立てることを目的に2001年から刊行している。教員の情報共有の場ともなっており、特に研究論稿は教育研究の分野でも数多く引用される実績を有している。『中部大学教育研究』No.17から論文の投稿区分を見直し、要約・キーワード・英文タイトル等の追加、およびレイアウトの変更と、編集・投稿要項を改訂した。2022年度は、No.22として一般投稿9編を掲載発行した。

(7) 教育活動顕彰制度

2008年度より学部における評価項目の重みを増加し、また個人だけでなく団体、グループに対しても表彰できる特別賞を取り入れた「教育活動顕彰制度」を導入し、毎年前年度の教育活動について表彰している。2017年度に、中部大学教育活動顕彰制度における教育活動優秀賞の4回目の受賞者に対して「教育活動金虎賞（きんとらしょう）」を制定し、2021年度受賞者が5人あった。その金虎賞を含め、2021年度の「教育活動優秀賞」は16人（2020年度14人）、「教育活動特別賞」は1人が受賞した。実施要項、選考総評等はWEBで公開されている。

(8) 『魅力ある授業づくり』プログラム

すべての教員（特に教育歴の少ない教員や新たに本学に赴任する教員）が持続的に教育力の向上を目指すことを奨励し、FDプログラムへの積極的な参加を奨励するために、FD・SD委員会が主催しているFDプログラムを活用して規定の要件を満たしたものに対して、本プログラムの修了証を授与している。修了の要件については、リーフレットやWEB上で公開されており、3年間の間に授業サロンまたは全学公開授業実施を必須としたポイント制をとっている。2022年度には7人の教員に修了証を授与した。なお、前述の7人は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、授業サロンなどの必須プログラムが実施できなかったこともあり、特例措置として、2018年度からの4年間で修了要件を満たした修了者である。本学の特徴あるFDプログラムへのさらなる積極的な参加を促すきっかけになることが期待される。

(9) FD オンデマンド講義（全国私立大学FD連携フォーラム実践的FDプログラム）

FD オンデマンド講義は、本学が加盟している全国私立大学FD連携フォーラムが運営している実践的FDプログラムを活用したものである。同プログラムは、毎年4月に視聴希望者を募り、教員が自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察できる知識、技能、態度、アクティブ・ラーニングを実践する能力を修得するプログラムである。2022年度は個人16人、2組織（2021年度個人17人、1組織）が受講した。引き続き、啓発の機会として活用されることが期待される。

(10) FD・SD研修会

2017年4月1日に施行された大学設置基準において、全ての大学にSD（Staff Development）が義務付けられたことを受けて、FD・SD研修会をSD研修の機会として位

置づけ、全教職員を対象にハラスメントに関する以下の研修会を実施した。

テ ー マ：『お互いを尊重し、守る為のハラスメント研修』

日 時：2023年1月25日（水）15時30分～17時00分 オンライン開催

講 師：堺 真理子 氏（株式会社ビズアップ総研 専任講師）

オンデマンド配信期間：2023年1月31日（火）～2月14日（火）

専任教職員の参加状況は、「オンラインでの当日参加」が366人、「オンデマンドでの後日参加」が217人、参加率は70%であった。

4. 2 学部・研究科での取り組み

(1) 工学部・工学研究科

工学部の教員の「魅力ある授業づくり」に関する意識およびスキルを向上させるためのFD活動を推進する、という目標に基づき、多くの教員が取り組みを行った。

- 1) 「中部大学教育活動顕彰制度 受賞者による講演会」を2022年11月16日、12月21日、2023年1月18日の3回にわたり、工学部ファカルティルーム(7号館3階)からZoom配信とオンデマンド配信を行った。
- 2) 第59回FD・SD講演会「合理的配慮」に関する考え方とその対応 ～私立大学での合理的配慮提供義務化に向けて～ が開催された。この講演会は、今後非常に有用な内容であるため、工学部に所属する教職員は必ずオンデマンド配信を視聴するよう推進した。
- 3) 2022年6月15日の工学部教授会にてハラスメント防止DVDを視聴した。

(2) 経営情報学部・経営情報学研究科

2022年度は『魅力ある授業づくり』を行い、学部・大学院教育の質を向上させるための様々な議論を主任会議並びに学部教務委員会などの場で行ったほか、いくつかの学部FD関連行事を実施し、多くの教員の参加を得た。学部が主催したおもなFD関連行事は以下の通りである。

1) 入学前教育プログラムに関するFD活動の実施

2022年4月26日（水）に学部主要メンバーにて入学前教育プログラムの中間報告会を実施した上で、学部全教員にその内容を展開すべく、7月23日に多くの教員の参加を得て入学前教育報告会を実施し、その年の新入生の特徴や課題などについて共有するとともに、スタートアップセミナー担当教員に入学前教育の個人データを配布し、学生指導に活用することとした。

2) 初年次教育意見交換会の実施

2022年9月21日（水）の15時30分より、スタートアップセミナー担当者を対象に意見交換会を実施した。この会では、今年度のスタートアップセミナーの講義内容や、今後の指導内容について意見交換を行った。

3) 学部FD活動の一環としての産業経済研究所講演会への参加

2023年1月11日（水）、宿澤直正氏による産業経済研究所講演会「中小企業、小規模事業者におけるDXの取り組み」に学部教員がFD活動の一環として参加し、近時の中小企業におけるDX展開の現状や課題について理解を深め、各教員の教育研究の参考とした。

4) 「学びに関する調査」結果に基づく経営情報学部FD活動

2023年3月18日（水）に教授会参加者全員の参加を得て、学部長より「学びに関する調査」結果に基づいて、主に学生の入学経路の違いによる学生の特徴と課題について報告があり、議論をおこなった。

(3) 国際関係学部

本年度は本学部が重点を置く以下の項目に関して、「実施方法の改善、留意点」などに関する情報共有を促進していくことで、本学部の『魅力ある授業づくり』に資する内容のFD活動を行った。

- 1) 学生と協働して創り出していく新しいスタイルの授業「ハイブリット・プロジェクト」の実施を通じて、学生の最新の学修ニーズを確認した後、学部構成員による情報共有を推進し、他の授業科目にもフィードバックした。授業内容の改善によって専任教員が担当する授業のより一層の質の向上を推進した。

ハイブリッドAでは教員1名分を複数教員にオムニバス形式で参加させることにより、より多くの教員が同科目に参加する機会を持つことを可能にするとともに、学生に常に新鮮味を感じさせるようにした。ハイブリッドBではシンガポール国立大学とのオンライン授業を通じて英語でSDGsの理解を図った。ハイブリッドDでは従来の英語、中国語、韓国語に加え、象形文字（ヒエログリフ）の学習を通じて文化の多様性の理解に努めた。

- 2) 低学年向けの演習系科目（スタートアップセミナー、国際基礎演習、国際応用演習A、同B）に関しては、学年・学期ごとに「コーディネーター」としてまとめ役の責任者を決め、授業の事前と事後のフォローアップを担当者全員で行い、学生の学習状況の把握に努めるとともに、成績評価基準の統一および改善点を担当者間で共有した。またコーディネーターを持ち回りにすることで、すべての教員が科目内容の改善や質の向上に参与するようになった。

- 3) 学部FD研究会を開催し、低学年向けの演習系科目の実施状況を学部教員全員が共有するとともにそのエビデンスを保存した。

また、同研究会にて、卒業研究（卒業論文）評価ルーブリックを議論し、試行版を作成し、実際に試行した。

- 4) 本学部が多ディシプリンの専門領域を持つことに鑑み、「卒論閲覧会」を開催し、教員間に共通の意識を醸成した。
- 5) 本学が推進するSDGsにかかる学部の講演会、研究会を実施したことで「授業外の学びの機会」を提供することができ、学生のモチベーションの向上と、教員の知見を深めることができた。
- 6) 国際関係学部に所属する全ての教員（20名）、国際関係学部事務室に所属する事務職員（4名）全員に対してハラスメント研修を行った。5月、6月、7月のそれぞれに種類の異なるハラスメント動画を視聴し、5月に関しては視聴後に簡単なレポートを作成提出し、6月と7月に関しては動画に付随しているテストを受けてもらった。

(4) 人文学部

- 1) 2021年度の人文学部FD・SD委員会（2021年5・11月・2022年3月）では、同年度の人文学部FD活動の内容を中心に、2020年度FD活動評価点検・実績報告書、2021年度人文学部の秋学期の授業評価、2023年度FD活動推進計画書などを検討した。また各学科では、それぞれ学科に沿ったFD活動を積極的に企画して取り組んだ。また各学科では、それぞれ学科に沿ったFD活動を積極的に企画して取り組んだ。
- 2) 入学センター所属教員、秋学期では人文学部の教員による講演会を開催した。加えて「セクハラ防止講演会」「ウクライナでボランティア活動の報告」、および「講義に取り入れるSDGsの視点」からSDGs教育(ESD)の特徴や歴史的背景を紹介し、各科目講義でSDGsを取り入れる際のポイントとは何かを考え意見交換を行った。

また秋学期は、教育活動優秀賞を受賞された人文学部の教員による遠隔授業上の工夫を

含めた数々の具体的な授業づくりに関する報告から今後の遠隔授業の授業づくりの参考となるご示唆をいただいた。最後に意見を交えることができ、講演内容について全体で理解を深めた。

(5) 応用生物学部・応用生物学研究科

○学部 FD 委員会の開催（7回）

適時、委員会を開催し、主に FD 活動推進計画案、FD 活動評価点検報告書案の作成と活動の推進を行なった。

- 1) 2021 年度学部 FD 活動の総括
- 2) 2022 年度教育活動顕彰制度優秀賞の学部評価項目・ポイント、自他による総合評価法の点検
- 3) FD 講演会の計画、運営
- 4) 2023 年度 FD 推進計画案を作成

○学科・専攻単位での FD 推進（適時）

学科及び専攻に固有の FD 課題を抽出し、検討を行った。特に、単位取得数不足、学生生活に適応できていない学生を早期に把握し、教員間で情報共有を行い、対策を行った。

○学部 FD 講演会（年 2 回）

個々の教員の多くは日々「魅力ある授業づくり」に取り組んでいる。一方、他の教員の取り組みを知る機会は少ない。そこで、2021 年度に教育活動優秀賞を受賞した本学部教員に講演していただき、その取り組みについて情報共有を行った。

1) 講演タイトル「研究室運営におけるウェブサイトの活用例」（2023 年 1 月 18 日）

講演者：堤内要（応用生物学部・応用生物化学科・教授）

2020 年度に教育活動優秀賞を受賞した堤内先生に、研究室における卒論指導・修論指導の効率化のためのウェブサイトの活用例について、情報提供をしていただいた。

また、あわせて学生募集に有効なサイトの構築について、参加者と情報共有した。質疑応答では、それらの取り組みを続けるためのコツについて、意見交換を行った。

2) 講演タイトル「生化学から環境生態学まで」（2023 年 3 月 15 日）

講演者：森山昭彦（応用生物学部・環境生物科学科・教授）

2021 年度に教育活動特別賞を受賞した森山先生に、今までの長い研究者・教育者としての活動を、最終講義としてご講演いただいた。含蓄に富んだ内容で、研究者・教育者としての理念を参加者と共有し、特に若い教員の意欲の向上と内省を促した。

(6) 生命健康科学部・生命健康科学研究所

2022 年 9 月 14 日（水）13:35~15:05、Zoom にて「資格試験対策の取り組み～工夫と課題～」というテーマで第 1 回 FD 研修会を実施し、84 名の参加を得た。国家試験をはじめとする資格試験に対して、本学部の各学科では様々な対策に取り組んでいる。学科における具体的な指導方法や成績向上への方策、課題などを共有し、今後の資格試験指導のみならず学習指導全般の改善および学部教育の質の向上を目指すものである。今年度は生命医科、保健看護、理学療法各学科から 1 名ずつ、国家試験等資格試験対策を担当する教員により、具体的な取り組みの工夫や抱えている課題についての発表とその後の質疑応答、意見交換が行われた。具体的な対策が示され、各学科での今後のよりよい試験対策に向け参考になる研修会であった。

(7) 現代教育学部・教育学研究科

FD&SD 委員会の取り組みは、主に 3 つある。

一つは、学部の FD・SD の企画と実施である。これについては、中島氏の講演、山本氏の

講演のことであった。

二つは、紀要の編集・発行である。これについて、学部構成員の研究的深化と発展を広く世に問う場として欠かせない研究所紀要と学部紀要をそれぞれ計画通り発刊できた。

三つは、FD・SDの研究的・実践的基盤となる図書整備である。これについては円安の進行で予定より少なくなったが、予算の中で着実に進めている。

(8) 人間力創成教育院

人間力創成教育院として、全学共通教育科目の魅力ある授業づくりのための改善を次の諸点に対して実施した：授業教授方法・授業内容・体制・施設・設備等の改善・充実と学外の研究会・ワークショップへの参加によるスキルアップ等。

文科省中教審で計画的展開が要請されている「高大連携・接続」の一環として、本学の併設高校との高大連携科目について、併設高校との意見交換、課題検討を行うとともに、高校（生）にとっても魅力ある授業づくりについて議論した。特に遠隔授業から対面型授業への移行に伴い、新型コロナウイルス感染症の予防対策をとり、学生の不安を感じさせないように、対面型の実技、講義が安心して受講できるよう注意を払って実施した。

また、専門職 EP（教職課程）では、教職に就こうとする学生の意欲を高めることを目指して「現職教員の教育実践を聴く会」を実施し、42名が参加し、教職の実際に対する理解を深めた。

(9) 国際人間学研究科

1) 講演会・シンポジウム等の開催

国際人間学研究科歴史学・地理学専攻と人文学部歴史地理学科との共催により、学外から講師を招き、講演会「子孫が語る日米の架け橋～ジョン万次郎の生涯」（2022年6月29日）を開催し、教育・研究力の向上に資する知識・情報・ノウハウの吸収に努めた。

2) 研究発表会の開催

これまで継続して実施してきた教員研究会（発表者計5名）と院生研究発表会「院生の力」（発表者計5名、コメンテーター計5名）をそれぞれ年2回開催し、教員間・学生間の相互理解や交流を深めるとともに、教員の教育・研究力の向上に努めた。

3) 報告書等の発行

国際人間学研究科のアカデミック広報誌『GLOCAL』（Vol.21、Vol.22）と院生の研究誌『国際人間学フォーラム』Vol.18の編集・発行に教員と院生が協働で取り組み、教員の教育・研究力の向上に資するとともに、院生への実践的な教育の場が提供されている。

昨年度同様に、各学部・学科および研究科が主催するFD活動が活発化している。人文学部は例年同様に独自のFD講演会を多数開催している。大学全体に公開していない各学部等の講習会等もあり、実際にはデータ以上の回数で開催されており、教職員の参加数も相当に増えてきているとみられる。

コロナ禍が収束しはじめたこともあり、対面でのFD活動も多数再開されてきている。しかし、オンラインの企画もあり、開催方法も多様になっている。

4. 3 2022年度のFD活動の取り組みの傾向

2022年度の本学のFD活動件数を、目的別、対象別、および内容形式別にまとめたものが次の3つの表である。なお、2013年度以降、「会議」や「打ち合わせ」は当該データから除外している。

まず、全体的に見て 2022 年度には活動件数がここ数年の中で最多となった。全学のみならず各学部や学科での活動がますます活発になっていることが示された。さらに、表 2.2 に示すように、学生を含む活動件数が 2022 年度において顕著に増加した。教職員と学生が一丸となった FD 活動が定着していることが伺われる結果となった。

なお、表 2.3-2 に示すように、2022 年度から形式別の活動件数集約において、項目の簡略化をはかった。『魅力ある授業づくり』プログラムの認定プログラムにおけるポイント認定（座学形式は 1 ポイント、ワークショップ形式は 2 ポイント）との関連を考慮した変更である。

表 2.1 目的別にみた FD 活動（件数）

目的	2022 年度	2021 年度	2020 年度	2019 年度
授業・教授法の改善	98	72	81	69
教員資質向上のための研究交流	70	73	50	66
FD 活動企画・運営	39	35	11	26
	207	180	142	161

表 2.2 FD 活動の対象別にみた FD 活動（件数）

対象	2022 年度	2021 年度	2020 年度	2019 年度
全学対象	59	56	49	56
学部・研究科対象	23	32	19	41
学科・教育科対象	65	43	50	51
	147	131	118	148
* 表 2.2 のうち、非常勤講師を含む	40	47	47	44
* 表 2.2 のうち、学生を含む	58	48	29	53

表 2.3-1 形式別にみた FD 活動（件数）～2021 年度まで

内容形式	2022 年度	2021 年度	2020 年度	2019 年度
研修会・懇談会	—	24	37	47
講演・報告会	—	60	27	54
ワークショップ・セミナー	—	23	37	24
制度・システムなど	—	28	25	17
		135	126	142

表 2.3-2 形式別にみた FD 活動（件数）～2022 年度から

内容形式	2022 年度	2021 年度	2020 年度	2019 年度
講演・報告会形式	65	—	—	—
ワークショップ形式	38	—	—	—
制度・システムなど	41	—	—	—
	144			

※ 上記の 3 表の合計件数は、重複項目があるため、一致しない。

5. FD 活動に関する学外との連携

5. 1 全国私立大学 FD 連携フォーラムでの活動

全国私立大学 FD 連携フォーラム (略称 JPFF) は、中規模以上の私立大学間での FD 分野における連携を目的として 2008 年に発足された。本学は 2012 年に JPFF に加盟し、その後 2020 年 6 月から地域担当幹事校、さらに 2021 年 6 月からは代表幹事校を担当している。2022 年度には代表幹事校として、大学間での連携強化を志向した以下の活動を行った。

1) 2022 年度 臨時幹事会・臨時総会

日時：2022 年 4 月 26 日 (火) 14:00～15:00

形式：オンライン

2) 2022 年度 幹事校・総会

日時：2022 年 6 月 18 日 (土) 12:00～14:00

形式：オンライン

3) 2022 年度 シンポジウム

日時：2022 年 6 月 18 日 (土) 14:00～16:30

形式：オンライン

テーマ：新学習指導要領を踏まえた大学教育のあり方～2025 年度入学生に向けた準備

参加者数：106 人

6. FD 活動に関する課題と今後の計画

2021 年度は“オンラインツールの活用に加えて、安全に配慮した対面実施も徐々に増え、質・量ともにコロナ禍前の水準に戻った (以上 2021 年度報告書より)” 年度となった。2022 年度も継続して全学および学部・学科ともに活発な FD 活動が展開され、その件数は上述したようにここ数年で最多を記録した。

一方で、昨年度の報告書に記載した、以下の課題についても引き続き検討を行った。その内容と今後の対策を以下にまとめる。

・専任教職員および非常勤講師が一体となった FD 活動の取組みについて

2022 年度には学生による授業評価に対する回答入力に関して、非常勤講師を含む教職員に対して例年以上に丁寧な要請を行った。それを受けて、全体的な回答率は増加し、一定の成果を得ることはできた。一方で、非常勤講師の回答率やコメント率はそれ程顕著な増加は認められなかった。引き続き、授業評価の趣旨の周知の徹底と、その伝達方法の工夫を通して、非常勤講師の回答率を上げることが必要である。

・一部の FD 行事の参加率の向上について

一部のプログラムについては十分な参加者が集まらないこともしばしばあり、特に 2022 年度には全学公開授業や授業サロン (春学期) をはじめ、他の FD 活動についても十分な参加者数が得られないことがあった。その対策として、すでに新任教員に対して一部の FD 活動を義務化することを FD・SD 委員会や FD 活動 WG にて検討している。次年度はその実施に向けて、より具体的な議論を進めることを展望している。